柳沢

宮沢賢治

青空文庫

林は夜の空気の底のすさまじい藻の群落だ。みんなだまって急いでゐる。早く通り抜けようとしてゐる。

俄に空がはっきり開け星がいっぱい耀めき出した。たゞその空のところどころ中風にでもかかったらしく変に淀んで暗いのは幾片か雲が浮んでゐるのにちがひない。

その静かな微光の下から烈しく犬が啼き出した。

けれども家の前を通るときは犬は裏手の方へ逃げて微かにうなってゐるのだ。

一寸来ない間に社務所の向ひに立派な宿ができた。ラムプが黄いろにとぼってゐる。社務所ではもう戸を閉めた。

（こんや、二時まで泊めて下さい。四人です。たいまつがありますか。わらぢがありますか。それから何かよるのたべものがありますか。ほう、火がよく燃えてるな。そいぢゃ、よござんすか。入りますよ。）

（さあ、二時までぐっすりやるんだぜ。ねむらないとあしたつかれるぞ。はてな、となりへ誰か来てゐるな。さうだ、土間に測量の器械なんかが置いてあった。）

青いきらびやかなねむりのもやが早くもぼんやりかゝるのに誰かどしどし梯子をふんでやっ

て来る。隣りの室をどんと明ける。
「やあ旦那さん。ぶん葡萄酒一杯やりなさい。」
「葡萄酒？　葡萄酒かい。お前がつくった葡萄酒かい。熱めてあるのかい。」
「まあ一杯おあがりなさい。さうです。アルコールを入れたのです。」
「アルコールを入れたのか。あとで？　作ってから？」
「さうです。大丈夫ですよ。本当のアルコールです。見坊獣医から分けて貰ったのであります。」
「どうして拵へたんだい。野葡萄を絞ってそれから？」
「いゝえ、あとで絞るのです。まあ、おあがりなさい。大丈夫であります。」
「さうか。そんなら貰はうか。おっと、沢山だよ。ふん、随分入れたな、アルコールを。」
「ずゐぶん瓶を沢山はじけらせました。」
「ふん。」
「砂糖を入れないでもやっぱり醸きます。」
「さうかい。砂糖を入れたら罰金だらう。おい、吉田、吉田。吉田を呼んで来て呉れ、あ、いゝよ、来た来た。おい吉田。葡萄酒ださうだ。飲まないか。」
「さうですか。おや。熱くしてあるのか。どれ、おい沢山だ。渋いな。」

ねむけのもやがまた光る。

「あしたは騎兵が実弾射撃に来るさうぢやないか。どこへ射つのだらう。」
「笹森山、地図を拝見、これです。なあに私等の方は危くありませんよ。」
「しかし弾丸が外れたら困るぜ。」
「なあに、旦那さん。そんたに来ません。そいつさ騎兵だんすぢゃぃ。」
ふん、あいつはあの首に鬱金を巻きつけた旭川の兵隊上りだな、騎兵だから射的はまづい、それだから大丈夫外れ弾丸は来ない、といふのは変な理窟だ。けれどもしんとしてゐる。みんな少し酔って感心したんだな。

「今日は君は楽だったらう。」
「えゝ、しかし昨日は鞍掛でまるで一面の篠笹、とても這ふもよぢるもできませんでした。」
「いや、おれの方だってさうだ。さあ寝るかな。あしたは天気は大丈夫だな。四つまでできるかな。」
「えゝ。」
「やっ、お邪魔しぁんした。まだ入って居ります。置いて行きます。」
「おい、持って行け、持って行け、もう飲まんぞ。」

さうだ。帝室林野局の人たちだ。

たしかにこれは夢のはじめの方の青ぐろい空だ。山の中腹から裾野に低く雲が垂れ、その星明りの雲の原の上でごろごろと雷が鳴ってゐる。実に静にうなってゐる。夢の中の雷がごろごろごろうなってゐる。雲の下の柏の木立に時々冷たい雨の灌ぐのが手に取るやうだ。それでもやはり夢らしい。

何時かな。もう二時半だ。少しおくれた。いや、丁度いゝ。寒い。

（おい。もう二時半だ。二時半だ。行かう行かう。）寒くてガタガタする。みんなうらうら仕度をしてゐる。ゆふべのつゞきの灰色ズックの鞄、ラムプの光は青い孔雀の羽。

（いゝか。火がついたか。さあ出よう。たいまつはまん中だぞ。寒いな。）

空の鋼は奇麗に拭はれ気圏の淵は青黝ぐろと澄みわたり一つの微塵も置いてない。

いっぱいの星がべつべつに瞬いてゐる。オリオンがもう高くのぼってゐる。

（どうだ。たいまつは立派だらう。松の木に映るとすごいだらう。そして、そうら、裾野と山が開けたぞ。はてな、山のてっぺんが何だか白光するやうだ。何か非常にもの凄い。雲かもしれない。おい、たいまつを一寸うしろへかくして見ろ。ホウ、雪だ、雪だ。雪だよ。雪が降ったのだ。やっぱりさっき雨が来たのだ。夢で見たのだ。雪だよ。）

空気はいまはすきとほり小さな鋭いかけらでできてゐる。その小さな小さなかけらが互にひどくぶつつかり合ひ、この燐光をつくるのだ。

オリオンその他の星座が送るほのあかり、中にすつくと雪をいたゞく山王が立ち黒い大地をひきゐながら今涯もない空間を静にめぐり過ぎるのだ。さあみんな、祈るのだぞ、まつすぐに立て。

（無上甚深微妙法　百千万劫難遭遇
我今見聞得受持　願解如来第一義）

力いつぱい声かぎり、夜風はいのりを運び去りはるかにはるかにオホツクの黒い波間を越えて行く。草はもうみんな枯れたらしい。たいまつの火の粉は赤く散り、大熊星は見えません。

（ここのところでよく間違ふぞ。左を行くと山みちなんだ。鳥居があるので悪くするとそつちへ行くぜ。）みちは俄に細くなつたり何本にもわかれたり。黒い火山礫と草のしづく。

（いつもなら火を見て馬がかけて来るんだが今はもうみんな居ないんだ。すつかり曇つたな。）

みちが消えたり又ひよいと出て来て何本にも岐れたり。

柏の枯れ葉がざらざら鳴つてゐる。

なんだか路が少しをかしい。もう大分来てゐるのだが。

（向ふにどてがあるかどうか一寸見て来よう。おい。ついて来るな。そこに居ろ。何だ。たいまつが消えたな。そこに居ろよ。はなれるな。ずゐぶん丈の高い草だ。胸きりある。）

（どてが無いよ。この路に沿ってゐる筈なんだ。事によったら間違ったぞ。もう少し行って見よう。けれども駄目だ。やっぱり駄目だ。こんな変な坂路がなかった筈だ。少し北側へ廻ったのかな。すっかり曇ったし、困ったな。仕方ない夜明け迄に一ぺん宿へ引っ返し日が出てから改めて出掛けよう。）

（けれども一寸路をさがして来よう。何とか抜けられるかも知れない。曇ってさへ居なかったら見当だけつけてぐんぐん本当のみちの方へ草をこいで行けばいゝんだが。仕方ない。ますます変な所へ来てしまった。やっぱり駄目だ。さあ引っ返しだぞ、戻りだぞ。やあ、降って来た降って来た。マントのあるのは誰々だ。さあ馳けるんだぜ。いゝか。そら。大きな岩だ。つまづくな。）

（ふん、あれがさっきの柳沢の杉だ。
何だ沼森の坊主め。ケロリとして睡ってやがる。）
所々雲が切れて星が新らしく瞬く。
（ははあ。こゝだ。こゝで間違ったんだ。仕方ない。まあ行って火をたかう。）

山だけまだ雲をかぶってゐる。

（おい。上等のお菓子だぜ。一つづつ分けるぞ。もうぢきだ。もう十五分。）しかし宿でも迷惑だな。

（路を間違へて帰って来ました。火をたきますよ。みんなきものを乾かせ。辛いな。けむりが。）辛い。けむり。それにきものが乾かない。烟（けむり）がみんなそっちへばかり行く。ぱっと燃えろ。さあ、ぱっと燃えろ。

（ああ、もう明るくなって来た。空が明るくなって来た。きれいだなあ。おい。）

深い鋼青から柔らかな桔梗（ききやう）、それからうるはしい天の瑠璃（るり）、それからけむりに目を瞑（つぶ）るとな、やはりはがねの空が眼（め）の前一面にこめてその中にるりいろのくの字が沢山沢山光ってうごいてゐるよ。くの字が光ってうご……。

もうすっかり暁だ。

（お握りを焼かう。はあ、ゆふべはどうも。途中で迷って。雨は降るし。）

（さあ日が出たやうだ。行かう行かう。さあ飛び出すんだよ。おゝ、立派、この立派。ふう。）

日の光は琥珀（はく）の波。新らしく置かれたみねの雪。赤々燃える谷のいろ。黄葉をふるはす白樺（しらかば）

の木。苔瑪瑙（モッスアゲート）。

（おゝい。あんまり馳（か）けるな。とまれ。とまれぇ。おゝい。止れったら。待てったら。）

うん。朝の怒りは新鮮だ。炭酸水だ。

鈴蘭（すずらん）の葉は熟して黄色に枯れその実は兎（うさぎ）の赤めだま。そしてこれは今朝あけ方の菓子の錫紙（すずがみ）。

光ってゐる。

青空文庫情報

底本：「新修宮沢賢治全集　第十四巻」筑摩書房
　1980（昭和55）年5月15日初版第1刷発行
　1983（昭和58）年1月20日初版第4刷発行
入力：林　幸雄
校正：mayu
2003年1月10日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

柳沢

宮沢賢治

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/